

- 寿岳文章とウィリアム・ブレイク研究——日常生活の思想家／佐藤光
- 啓蒙と虚偽——ヘーゲル『精神現象学』第VI章Bを中心に／齋藤渉
- 東日本大震災が暴いた「隠されたもの」——津島佑子『ヤマネコ・ドーム』を中心に／石川真奈美

前号目次

編集後記

『超域文化科学紀要』25号をお届けする。進行係であるべきわたくしの極端な怠惰と不手際から、刊行が例年よりも遅れてしまった。執筆者、編集委員をはじめ、ご関係のみなさまに心よりお詫びする。ひるがえって、主題も方法も多種多様な論文を収めることができたのは、ただひたすら、ありがたいことである。

表紙の写真は、1889年2月11日、大日本帝国憲法発布式の当日、旧制第一高等中学——本郷への移転を翌月に控えた一ツ橋校舎——で撮影されたもの。否が応でも眼を引く画面中央の“OUR TRUE HEART”は「真心」あるいは「忠心」の直訳を試みたのだろうか、真意は藪の中で、微妙なおかしみが残る。他方、周囲の幟旗のうち、向かって左のそれには「陛下万々歳」とあり、右のものは読める部分を拾うと「飛揚雲…」となりそうだが、よくわからない。また、眼を凝らしてみると、学生たちは兵装を模しているらしく、真ん中の数人は江戸風の軍装をまわっている。左手に大砲を模した小さな山車がのぞき、その前にアイヌ装束と思しき姿の者もいる（ちなみに、知里真志保が一高に入学するのは約40年後、1930年のことである）。ともあれ、さまざま「趣向」を凝らし、いざ祝賀の行列に加わらんとする若者たちの集合写真なのだった。

若さの勢いを見るか、稚気も露わとを感じるか、また、その稚さに危うい芽があると質してみるべきか。物思わないではないが、いずれ臆断となってしまうから、代わりに、証言をひとつ引きたい。「朝起きて見れば一面の銀世界、雪はふりやみたれど空は猶曇れり。余もおくれじと高等中学の運動場に至れば早く已に集まりし人々、各級各組そこここに打ち群れて思ひ思ひの旗、フラフ〔ママ：オランダ語の「旗(vlag)」から〕を翻し、祝憲法発布、帝国萬歳など書きたる中に、紅白の吹き流しを北風になびかしたるは殊にきはだちていさましくぞ見えたる」。よく知られているかもしれない、当時、本科一年生だった正岡子規の回想である（『墨汁一滴』1901年2月11日の稿）。かれ自身は、二重橋での万歳三唱まで付き合ってから、ひとり芝の「園遊会」に歩いて出かけ、深更まで「飯店太神楽など」を楽しんだ。行きの道すがら、同日創刊の新聞『日本』第1号を手取る。「其附録にしたる憲法の表紙に三種の神器を描きたるは、今より見ればこそ幼稚ともいへ、其時はいと面白しと思へり」。発行元の日本新聞社へ入るのが3年後、この一文を認めているのは、さらにそれから9年後。「十二年の歳月は甚だ短きにもあらず」。「其時の「面白し」を「今」は「幼稚」と思う。印象の変化は、さりげなく、ただし消しがたく明言されている。そうしてまた、『日本』は順調に発展を遂げ、自身は「空しく足なへ」となった。では、「其時生まれ出でたる憲法果たして能く歩行し得るやいなや」。ちょうど120年前に呟かれた問いが、むろん必要な変更をとまなつて(mutatis mutandis)、しかし間近くから発せられるようでもあり、なにか、吸い込まれる思いがする。

*

画像の選定にあたっては折茂克哉先生(駒場博物館)にお世話になった。記してお礼申し上げる。

(Y.M.)